

## A Crab's Barber

A crab, thinking over, opened a barber shop. It was a good idea for the crab.

The crab said to herself, because there was no visitor.

“How bored a barber is.”

So the crab went to a shore with her scissors, where an octopus was taking a nap.

“Hello, Octopus.”

She cried to him.

The octopus woke up and said,

“What's up?”

“I'm a barber. Is there anything I can do for you?”

“Look at me! Do I have hair on my head?”

The crab looked carefully at his head. It was true he had no hair on his shell. Even if she was a good barber, she couldn't cut the hairless head.

So the crab went to a mountain, where a raccoon dog was taking a nap.

“Hello, Raccoon dog.”

He woke up and said,

“What's the matter?”

“I'm a barber. Is there something I can do for you?”

The raccoon dog, who was mischievous, thought of a dirty trick.

“All right. I'll ask you to cut my hair. But you must promise me to cut my father's hair too, after I was finished.”

“Yes, it's a piece of cake.”

The time came when the crab showed her skill.

Chiokkin, Chiokkin, Chiokkin.

Well, a crab is not so big. Compared with a crab, a raccoon dog is much bigger.

What's more, he is covered with hair all over his body. So she made little progress with her job.

She kept cutting him hard, foaming at the mouth. It took her three days to finish her job.

“Well, as you promised me, will you cut my father's hair?”

“How big is your father?”

“He is as big as that mountain.”

The crab was confused. She thought it would take many days for her alone to complete it.”

So she made all of her children barbers. Not only her children but her grandchildren, great-grandchildren and all of the born children became barbers.

That's why even so tiny crabs seen on the roadside have their scissors.(2017/11/06)



## 蟹のしょうばい

蟹（かに）がいろいろ考えたあげく、とこやをはじめました。蟹の考えとしてはお



おできでありました。

ところで、蟹は、

「とこやというしょうばいは、たいへんひまなものだな。」

と思いました。と申しますのは、ひとりもお客さんがこないからであります。

そこで、蟹のとこやさんは、はさみをもって海っばたにやっつていきました。そこにはたこがひるねを

していました。

「もしもし、たこさん。」

と蟹はよびかけました。

たこはめをさまして、

「なんだ。」

といいました。

「とこやですが、ごようはありませんか。」

「よくごらんよ。わたしの頭に毛があるかどうか。」

蟹はたこの頭をよくみました。なるほど毛はひとつもなく、つるんこでありました。いくら蟹がじょうずなとこやでも、毛のない頭をかることはできません。

蟹は、そこで、山へやっつていきました。山にはたぬきがひるねをしていました。

「もしもし、たぬきさん。」

たぬきはめをさまして、

「なんだ。」

といいました。

「とこやですがごようはありませんか。」

たぬきは、いたずらがすきなけものですから、よくないことを考えました。

「よろしい、かってもらおう。ところで、ひとつやくそくしてくれなさいいけない。というのは、わたしのあとで、わたしのお父さんの毛もかってもらいたいのだ。」

「へい、おやすいことです。」

そこで、蟹のうでをふるうときがきました。

ちょっくん、ちょっくん、ちょっくん。

ところが、蟹というものは、あまり大きなものではありません。蟹とくらべたら、たぬきはとんでもなく大きなものであります。その上たぬきというものは、からだじゅうが毛むくじゃらであります。ですから仕事はなかなかかどりません。蟹は口から泡をふいていっしょうけんめいはさみをつかいました。そして三日かかって、やっつとのこと仕事はおわりました。

「じゃ、やくそくだから、わたしのお父さんの毛もかってくれたまえ。」

「お父さんというのは、どのくらい大きなかたですか。」

「あの山くらいあるかね。」

蟹はめんくらいました。そんなに大きくては、とてもじぶんひとりでは、まにあわぬと思いました。

そこで蟹は、じぶんの子どもたちをみなとこやにしました。子どもばかりか、まごもひこも、うまれ

てくる蟹はみなとこやにしました。

それでわたくしたちが道ばたにみうける、ほんに小さな蟹でさえも、ちゃんとはさみをもっています。